AGC レポート
山岳地理クラブ会報

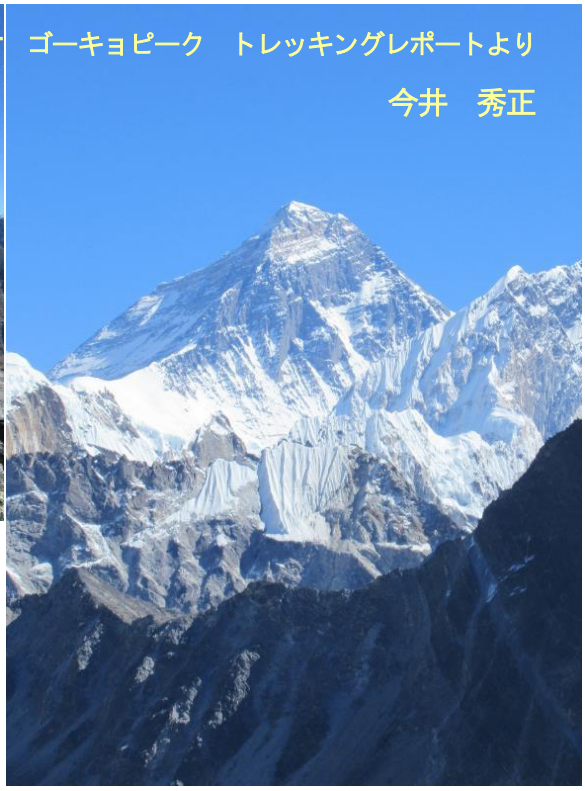
VOL　５８

発行 2017 年 4 月 25 日
日本山岳会　山岳地理クラブ
URL●www.jac.or.jp/doukoukai

頭の上はエベレスト―――

ゴーキョピーク　トレッキングレポートより

今井　秀正



エベレストがあるクーンブ・ヒマール地域の西の端にチョオユー（8188m）がゆったりと聳えている。その南にあるゴーキョピーク（5360m）はネパール東部、チベット国境の8000m級の山々を手に取るように見渡せる展望台になっている。
2016 年 11 月に訪ねてみた。そのレポートから抜粋して報告する

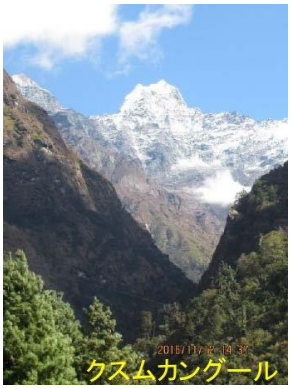
旅程は11月12日にルクラ2840mから歩き始め、ナムチェバザール3440mで1日高度順化し、17日にゴーキョ湖畔のロッジ4790mに入る。翌日は高度順化のため、チョオユーベースキャンプへつながるNgozumba氷河を5000m付近までトレッキング。翌19日、ゴーキョピークを往復し、20日にレンジョラを越え、チベットからナムチェバザールへの交易に使われていた道（今は閉鎖）を下る。ナムチェで往路に合流してルクラには23日に帰着するという計画だ。

日本からネパールの首都カトマンズまでは直行便がないので、11 日 0 時 30 分発のタイ航空を利用してバンコクを経由した。カトマンズに一泊して翌12日は8時に15人乗りの双発の飛行機でルクラに入った。

ルクラの空港は山腹のわずかな直線の地形に作られているため、滑走路は460mと短く、かなり傾斜していて着陸時は上り坂、正面は壁。離陸の時は下り坂で、先は600mの谷である。航空母艦のようで少々不安を感じたが、毎日何回も飛んでいるパイロットたちは熟練している。滑走路終点の壁の上にあるロッジの食堂で朝食。飛行機が何便も食堂めがけて飛んでくるようで、これもちょっと不安ではあった。

ルクラ 2840mから今日の宿泊地パクディン 2610mまではほとんど下りで、いくつもの橋（ほとんどがつり橋）を渡った。車が走る道路がないので、荷物運びにはポーターかゾッキョになるのだが、道はこれの排泄物があちこちにあって、よけて通るのにはかなり気を遣う。糞は乾燥して風に吹かれて舞い上がるわけだが、われわれはこの中を進むことになる。ポーターやガイドなど地元の人がマスクをしている理由がよくわかり、ここからマスクを手放せなくなってしまった。途中、タドコシのロッジで昼食。屋外のテラスからは谷を通してクスムカングール 6367mが雪をかぶって正面に見えた。距離は 7~8kmだが、岩の壁の急峻さとその高さは初めて見るものであり、スイスアルプスとはまた違って“怖さ”のようなものさえ感じた。資料によると、この山は日本人が初登頂らしい。

―――（略）―――



13日はパクディンからナムチェバザール3440mまで約800mの登りだが、ナムチェの2km南のラルジャからはるか上にかかるつり橋（Larja Bridge）を渡る600mの急登で、このコースでは一番きつかったといってよいだろう。ここでは荷運びの息を切らせたゾッキョが多く、そのたびに山側へ寄って道を譲らなくてはならない。おまけに糞は増えるばかりだった。今日は谷間と樹林の中なので、特段の展望が期待できるところではなく、日本の山道とあまり変わ

らない。途中のモンジョではサガルマータ国立公園へ入るツーリストチェックの事務所がある。15時すぎ、ナムチェの街入口の門をくぐった。脇には先の大地震で壊れた水路を日本の援助（どこかの県）で整備された水路があって、そこには洗濯場がきれいに作られていた。

―――（略）―――

18日は5000m付近までの高度順化日。8時半出発で、ゴズンバ氷河に沿ってチョオユーベースキャンプに向かう。正面にチョオユー8188mがどっしりと見える。ダワが、「あっ、雪崩だ！」というので見れば、チョオユー南面の中腹からとてつもなく大きい雪煙が上がっている。15km程離れているが、あの大きさに見えるというのは雪崩の規模が違う。ヒマラヤの雪崩を見るのは初めてだ。今日の標高差はたかが200mほどで小さなアップダウンがあるのみだが、昨日ほどではないにしてもそのきつさはかなりつらいものであった。軽い荷物だが、ダワの指示でクンザンが持ってくれることになった。正面にはチョオユーに並んで耳が二つあるギャチュンカン7952mのそそり立った南壁が見えてくる。ゴーキョの3番目の湖から上へ5番の湖付近が目的地。ここに東からGaunara氷河が合流していて、氷河を通した東の果てにエベレストが見通せるビューポイントだ。空は快晴、風もない。薄いダウンジャケットでも寒さは感じないし、気分爽快そのものだった。ビスケットを少しつまんで12時前に帰途に就いたが、下り道もup&downでずいぶん長く感じた。ホテルへ戻って昼食という計画だったが食欲は全くなく、ジュースとマサラティーで終わり。やはり高山病の傾向だった。しかし血中酸素濃度は90%あった。睡眠中は呼吸が浅いため、朝は低く、活動した夕方はそれなりの濃度になるようだ。食欲とはあまり関係はないように思う。

19日、今回の目的ゴーキョピークへ。食欲がないとは言っても、食べなければ力が出ない。朝食は持参した五目飯とみそ汁にした。“和食”は、こういう事情の時にはずいぶん役に立つ。7時出発。ホテル近くの湖のほとりからすぐに急登が始まる。曽根さんは腰の調子が思わしくないので、今日も休養との事だった。登るにつれ、湖の青さが際立ってくるし、畔のホテルやロッジが小さく見えるようになった。楽ではないものの、前日のトレッキングの効果を大いに感じた。やがて戦（いくさ）の陣旗のような白いものが見えてきて頂上。大きな岩が連なった比較的長い尾根のようなところで、タルチョーといわれるお経が書かれた旗が万国旗のように青、白、赤、緑、黄の順に何枚も、そしてそれが何条も掲げられている。写真で見る8000m級の高山とは違い、多くのトレッカーが入れ代わり立ち代わり訪れる“親しみやすい”ピークという印象だった。でも展望は抜群。チベット国境の山々がチョオユーから東へギャチュンカン、プモリ、エベレスト、ヌプツェ、ローツェ、マカルー等々、絵葉書で見る7、8000m級の山々を見渡すことが出来た。その向こうは中国チベット自治区だ。ついついエベレスト方面にだけ目を奪われてしまうが、もちろん南、西には名前がわからない山々や明日超えるレンジョラなど360度の展望がある。頂上には20人ぐらいの人々。ドイツ語が多く、英語をしゃべる人は一部だった。もちろん日本人は我々だけである。下りは1時間ほど。今日の登りは昨日ほどのきつさは感じなかった。ダワにいわせると昨日の高度順化の効果だそうだ。血中酸素は87%だった。

20日。ゴーキョのホテルを8時に出てレンジョパス5340mへ。青い湖を足元に見ながら高度を上げて行く。崩れた岩の中の道ははっきりしない。時々わからなくなるが、峠にしかいけない道だから足場を捜してそれぞれ勝手に上に、上にと歩いた。峠直下はほとんど壁のようだが、Z字に登る。11時半すぎにひょっこりと峠着、ヤレヤレ。狭い峠には10人以上の先客がいた。展望はチョオユーは見えないものの、むしろゴーキョより良いといってもいいかもしれない。峠の西側は今登ってきた東側と変わらず切れ落ちていて、やはり湖が見える。登りはゴーキョから600mほどの標高差だが、下りは宿泊予定のルンデン4400mまで1000m程ある。岩や湖をいくつか見ながら単調な道を下り、宿に着いたのは16時半頃だった。下りでは空気の薄さは問題ではなかったが、少し疲れを感じた。

（以下　略）

トレッキングレポートは16ページにわたり全行程の記録が収められています。ご希望の方にはファイル（pdf）をお送りいたします。メールにてご依頼ください（imahi@vm01.vaio.ne.jp）

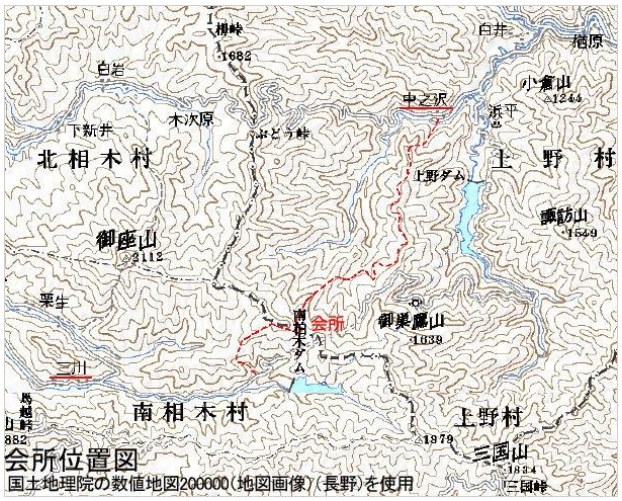
連載・関東の古道　①

会所（上信国境―上野・南相木村境）その１

富永　滋

【概要】

会所（カイショ）とは、上州神流川支流中ノ沢の中之沢から南佐久の三川（ミカワ）へと越す峠の名である。途中、茶屋ノ平で弥次ノ平林道を北へ下れば栗生にも通じている。コレイ峠の異称を持つが、この呼称は誤りと考えられる（詳しくは後述する）。不正確ながらおおよその道筋が地形図に示されており、中之沢集落から品塩山、ブンキガ小屋ノ頭の西を絡み、扇平付近で釜ヶ沢を渡って中ノ沢・釜ヶ沢中間尾根に取り付き、石仏ノ頭（1916. 0m、三角点「会所」）と扇平峰（1847 独標）の間の 1690m圏鞍部付近で上信国旗を越え、茶屋ノ平で三川・栗生川中間尾根に乗り、そこから一気にヌクイノ窪を下って大黒沢に合し、三川に沿って奥三川を経て三川集落まで下っている。この道はかつては馬が通った道だったという。



会所位置図
国土地理院の数値地図200000（地図画像）（長野）を使用

【創成期の峠道】

古来上州上野村は、信州・佐久との交流が盛んだった。上野村から鬼石までの神流川は「川丈十三里四十八橋」と言われ、増水などで橋が一つでも破損すると荷車が通行不能となるので、米を中心に佐久への依存が強かった。そもそも西毛や秩父は台地のため利水不良により米作が盛んでなく、甲州や佐久から米を購入していたので、上野村はその通り道になっていたのである。この交易は第二次大戦前まで続き、中でも中心的な役割を担った十石峠では、多い日で十石（約1．5トン）以上の米が馬背で担ぎ越されていた。この十石峠道が神流川を離れる白井の奥、さらに川沿いに数粁遡ったどんづまりの中之沢に、川中島の戦い（永禄四年〈1561 年〉）の後、武田勢の一部が住み着いたという。神流川流域を治めていた小幡氏は当時武田の配下にあったので、武田領の佐久と交流が盛んになったことであろう。中之沢では、武田信玄の時代にこの道を使って信州から国境を越えて米を上州へ運んだと言われ、中之沢に居を構えた一族への物資供給のため、峠道が拓かれたとの憶測ができるかも知れない。

徳川の治世下、江戸幕府は寛永八年（1631 年）に白井関を設け、上信間の通行は関所を通過する十石峠、梅峠の道に制限された。さらに正徳四年（1714 年）に御林が設定され、原則的に一般市民の立入りが禁止されたが、交渉の末、山稼で生活する村民の嘆願が聞き入れられ、地元民には御林における一定の生産活動が許可された。地元民の領内通行に限ってとは言え、峠道は引き続き通行が許容され、辛うじて維持されたものと推測される。天保年間（1830～1844 年）から信州から馬背で米等を輸送していたとの話があるので、国境を中之沢、三川の双方の住民の取引場所として定め、この峠道が使用されたのであろう。峠が「会所」の名で呼ばれるようになったのも、その関係と思われる。また、御林は幕府の命より御用木として伐採されることがあった。明治四十二年の高崎小林区署の「富岡事業区施行按説明書」によれば、宝暦年間（1751～1764 年）、安政年間（西暦 1854～1860 年）に本谷国有林相当地域で大掛かりな伐採があったとの古老の話があるとされ、 また文政年間（西暦 1818～1830 年）に中ノ沢上流で伐り出しが行われたとの口承があり、清水日向沢・石仏沢出合の少し下に御林奉行が山泊に使用した検分小屋と呼ばれる岩穴があった。従って梓山からの秩父奥地の伐採現場への仕送り同様、作業員の生活物資の輸送路として峠道が活用された可能性が考えられる。

公式な峠道ではなかった会所越は、江戸時代の文書や絵図には全く現れない。一見会所越に見える道は、作図精度が低いため紛らわしく見えるが、全て梅峠道である。しかし明治期に入っても各種図上に会所越えの道は認められず、明治十一年の南佐久郡村誌にも会所越えの道についての記述がない。白井関が廃止された明治二年以降、峠越えを禁ずる理由はなく、村役人も把握していない知る人ぞ知る道であったと思われる。

しかし峠道は確かに存在していたようだ。原全教が、三川で逗留の便に預かった家のご隠居井上酋吉氏（昭和五年）、近郷に名を馳せた中之沢の猟師仲沢喜六氏（昭和八年）から得た情報によれば、明治十三年頃まで信州から馬背で米を背負い越していたという。後に明大ワンダーフォーゲル部の原喜啓も、恐らく中之沢の仲沢祐十郎氏から、明治十四年頃まで馬による米の輸送が行われていたと聞いている。かつて三川源流のヌクイノ窪には往来に利用した小屋があり、さらに恐らく会所の峠上と思われるが会所小屋という小屋があったという。明治三十七年の陸地測量部の記録によれば、中之沢からブンキガ小屋ノ頭の近くを通って会所へ通ずる道があったといい、また三川から会所を経て浜平へ至るの道があったともいう。この記録では上州側の道が中ノ沢、浜平の何れに向かっていたかが不確かだが、釜ヶ沢右岸が中之沢の稼山であることからして、道は基本的に中之沢へ通じていたのであろう。浜平への道があったとすれば、井戸沢を経て品塩山の南で峠道に接続する国有林巡視道のことかも知れない。

【地形図への収載】

峠道は大正元年測図（同三年刊行）の初刊行の地形図に収載され、世に存在が知れるようになった。大正二年に高畑棟材は、神流川源流近くの三岐で中之沢から信州へ二本の道（八王子峠と会所）があると聞いたので、当時まだ地元では峠道の存在が意識されていたようだ。しかし高畑は同十年の再訪時、浜平の宿で峠道の荒廃を耳にし、同十五年に大島亮吉が上栗生を訪れた時も、通行者がなく痕跡もないほどと聞いている。これには、大正十二年、中之沢から北相木へとブドウ峠を越える良い道ができたことも関係したであろう。また当時、付近には営林署が拓いたと思しき御座山林道（木次原～熊穴沢出合～うだの沢～下新井）、弥次ノ平林道（三川～サブイノ沢出合上～茶屋ノ平～栗生沢～弥次ノ平）、丸岩林道（熊穴沢出合～弥次ノ平～一平沢～丸岩窪出合～栗生）、三国境林道（サブイノ沢出合上～所並ノ頭～梓山）、などがあった。三川からサブイノ沢出合を経て、ヌクイノ窪を登って茶屋ノ平に至るまでの間、峠道は弥次ノ平林道に組み込まれていたと見られ、その区間だけは踏まれていたようだ。なお原全教の著書では、沢又ノ窪とサブイノ窪を取り違えて逆にしているので、参照する場合は注意されたい。昭和五年、原全教が三川で聞くには、信州側は会所までがようやく通行でき上州側は跡形もない状態、また昭和八年に中之沢で聞くには、中之沢～釜ヶ沢渡沢点までは辛うじて明滅しているが、尾根に取り付いて会所に至る板小屋日向の部

分が、たまに猟師が通るくらいで笹に覆われ不明になっていたという。昭和十年代中頃に三川に入った春日俊吉も、宿の老主人に「さァ、歩けるかねえ。荒れてるで。」との言葉を受けている。

このように特に上州側の荒廃が酷かったため、登山家による実際の通行記録は信州側のものしか見られない。昭和五年、原は三川から弥次ノ平林道を辿って茶屋ノ平先の会所分岐まで歩き、サブイノ沢出合上の三国境林道分岐から茶屋ノ平までを一時間二十分で登っている。また春日は同じ道をさらに会所まで辿り、ヌクイノ窪から会所まで一時間半を要したというので、いずれにせよ道の状態はまずまずだったようだ。会所は目標物もないおよそ峠らしくない所で、春日は気づかず通過し、だいぶ上州側へ下ってしまい引き返したという。実地で見るとまさにその通りで、密林中であの地形を通過した場合、多くの山襞の一つにしか見えず、とても峠とは認識できないだろう。うっかり行き過ぎたということは、会所を越えて上州側へ足を踏み入れても同様の道が続いていたことを示しており、峠付近の高い部分では細道が続いていたが、板小屋日向（釜ヶ沢左岸尾根）を下る部分の笹の繁茂が酷かったことが窺える。この一帯は笹の衰退が進んだ現在でも、部分的にヤブの濃い箇所がある。

昭和二十一年に木次原から相木川を詰めた大石眞人が、御座山林道、丸岩林道の衰退を報じたことからして、会所越えの峠道もまた、第二次大戦前後に一層衰退が進んだと見られる。

（つづく）

山行報告　「関東ふれあいの道」GPS 山行　神奈川県 7-8

鷹取山、里の道と大磯，高麗山の道

鶴田泰子

今回は関東ふれあいの道、神奈川県 7，8 番を続けて 1 日で歩こうと少しアレンジして自動車道路をなるべく短くして山路に変更して 7，8 番コースをつなげて歩いてみた。時間的にには道を探したりするロス時間がかかり、7 時間ほど歩いて予定より少し遅くなり、平塚駅に着いたのは17時半を回っていた。

◇

朝、小田急秦野駅 9 時集合、9 時 17 分発平塚行バスで金目川の南平橋で降り、1 月に行った弘法大師と桜の道と反対方向の急坂を南南東へ行く。登り切った畑の中の広い道は周りに色とりどりの花が群生していて実に楽しい。

土屋城跡

バス停から 15 分ほどで熊野神社に着き、お参り。境内に標高 62m の標石あり、小高くなっているのだ。100m先には手入れの行き届いた寺、大乗院がある。境内の立派な桜がまだ咲いてなく残念。大乗院境内から裏手にかけて土屋城跡となっており、あまり派手ではないが、鎌倉御家人の栄枯盛衰を感じさせる土屋一族の墓や城址跡があり、史跡の詰まった長閑な農道である。民家の間を通り抜け、県道を渡り、神奈川大学を右に見ながら急坂を上った道路の左手に入ったところに、妙円寺、銭洗い弁天がある。丁度お祭りで、長閑な太鼓の音を響かせていた。一巡して 10 時 30 分を過ぎていた、南平橋バス停から 1 時間歩いた。進路を南に折れ、ゴルフ場脇の道を鷹取山へ向かう。途中道路わきの路傍休憩地より大山や塔が岳がよく見え、昨日降った雪が沢状に白く光っていた。11 時 50 分に鷹取山に到着。鷹取神社の少し手前の小高い林の中に218、7mの三等三角点があり頂上だ。タブの木やシダ爺の巨木に囲まれた立派な神社で、この花咲くや姫が祀られており、女性はお参りの度に少しずつきれいになるとの言われが書いてある。

浅間山三角点

鷹取山ポイント

昼食を済ませて記念写真を撮り、12 時 40 分湘南平に向かって出発する。急な丸太の階段を一気に下り、東の池の手前で小田原厚木高速道路の下をくぐる。ここで大磯方面へ行かず平塚方向へ自動車道を、右手に新幹線を見ながら歩く。1km ほど先で新幹線をくぐり山道を登っていく。小松製作所研究所の敷地を回り、神社の前を通ったところで鷹取山近くの霧降の滝からつずく湘南平への道の道標が 2，3 あったが途中でなくなり、結局住宅地や畑の中をくねくね回って、急坂を、湘南平にそびえる赤白の電波塔目指して登った。7 人はそれぞれに 15 時頃千畳敷広場に着く。霞んでいたが、湘南海岸、江の島、丹沢方面の展望を楽しみ、電波塔をバックに記念写真を撮り、浅間山に向かう。 狭い頂上に 181.3m の 1 等三角点がきれいに守られている。狭い尾根筋を八俵山、高麗山、と急いで回り高麗神社に下り着いたのは 16 時 10 分。花水のバス停より遅れのバスに乗り、平塚駅前で打ち上げとする。

今回は久しぶりの堀内さんの参加で、湘南地方の断層の話やら、地形の話をいろいろ聞かせていただき楽しかった。
里道のわかりにくさに、地図読みの難しさを感じた山行でした。

◇

2017 年 4 月 2 日（日）快晴。
行程：秦野=バス=南平橋－土屋城跡－妙円寺－鷹取山－生沢－寺坂－湘南平－浅間山－高麗山－高来神社－花水橋=バス=平塚
参加者：7 名（北野、近藤、大西、堀内、高橋、関、鶴田）

AGC レポート　vol-58　2017 年 4 月 25 日発行
発行：日本山岳会・山岳地理クラブ（代表・北野忠彦）
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会　気付
TEL　03-3261-4433　　FAX　03-3261-4441
編集担当：近藤　　E-mail：yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp